朝日新聞
ASAHI SHIMBUN
(大阪)
'06.8.25

P57-16

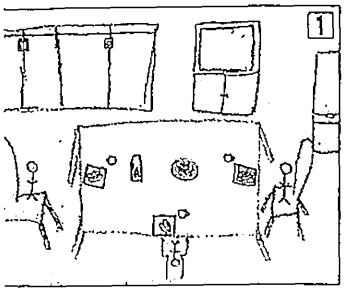
食卓の絵 表情乏しく

小学生、家族とだんらん不足が影響?

家族でご飯を食べているいつもの様子を、小学生に描いてもらうと、人物を円と一本線だけの記号のように表現する小学生が増えている。食卓でのコミュニケーションが少なく、楽しく話したことを思い出せないために、絵の中の家族の表情や存在感が乏しく「マーク」になってしまうのではないかと、臨床心理や美術教育の専門家は指摘している。

(川上健)

食卓のパンやサラダ、いすやテレビは丁寧に描かれているのに、3人の人物はマーク=絵1。小学5年の女子が母と弟と食べた朝食の様子を描いた絵だ。



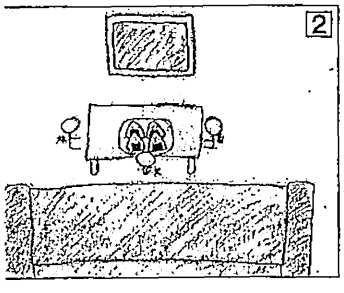
1

子どもの絵のタイプ別割合

	1995年	2002年	2003年	2005年
コミュニケーション充実型(人物に表情がある)	47%	39%	38%	20%
人間関係貧困型(人物がマーク)	20%	22%	29%	40%
意欲希薄型(人物に手が描かれていない)	14%	6%	4%	4%
強制感型(人物がいない)	6%	10%	15%	6%
調査地域・人数	全国 約880	全国 約1500	埼玉 約650	東京 約310

農協の全国組織でつくる「朝ごはん実行委員会」が昨年2月、首都圏の小学5、6年生に朝食の様子を描いてもらったところ、多数の「人マーク」が登場した。6年の男子が描いた父親と妹とおにぎりを食べる姿も、マーク=絵2。

6年の女子が描いた、アジの開きや納豆がきれいに食卓に並ぶ絵でも、人物は「母」「自分」という漢字の入ったマークで、手が描かれていない=絵3。いずれもテレビの存在感が大きい。ご飯とみそ汁、漬物だけでも、楽しそうに家族で食べる6年の女子の絵もあった=絵4。

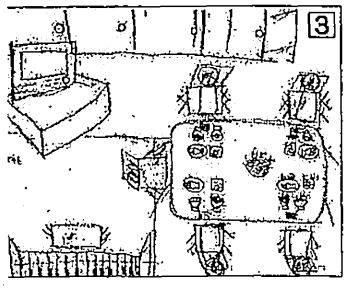


2

絵を分析した臨床心理士の室田洋子・聖徳大教授(発達臨床心理学)は「一緒に食べる人はいても、食卓で会話や笑顔が少ない家庭の子どもの絵に人マークが出てくる」と話す。

室田さんは、子どもの問題行動に悩む親たちのカウンセリングを30年以上続けてきた。親が子どもに手料理を食べさせることから会話の糸口が見つかった例もあり、親子間のコミュニケーションを再生する場として食卓を重視するようになった。

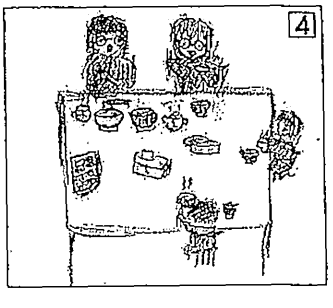
家族の結びつきを絵から分析する「動的家族画」という調査方法を使い、95年から一般の7千人以上の子どもたちの絵を見てきた。絵のテーマは「家族がごはんを食べている様子」で、対象は小学4~6年生。ものを客観的に見る力が育ち、描く思いに偽りが少ない年齢だという。



3

室田さんは、笑顔で話すなど人物の表情が豊かな「コミュニケーション充実型」、人物がマークや文字で簡略化された「人間関係貧困型」、人物に手が描かれずに食べようとしていない「意欲希薄型」など、絵を表現の特徴から八つに分類した。調査した地域や人数が違うために単純比較はできないが、「コミュニケーション充実型」は95年の47%から年々減り続け、05年は20%。「人間関係貧困型」は20%から40%に倍増している=表。

「意欲希薄型」の絵も減っている。「このタイプは親の管理が厳しい家庭の子どもなどに多い。良くも悪くも、家族が食卓でかかわり合うことが減っている表れでは」と室田さん。「食べ物を分けたり、話し出すタイミングを待ったり、食卓は人への配慮を学ぶ場でもある。コミュニケーションが苦手な若者を生み出す原因のひとつには、食卓の機能低下があると思う」



4

人を記号で表現/テレビが存在感

小中学校で美術教師の経験もある甲南女子大学人間科学部の東山明教授(美術教育)は「食事の時にお父さんが新聞ばかり読んでいても、気持ちがこもればその姿を描ける。子どもたちの絵を描く技術の低下もあるが、食器や棚は描けるのに人物が記号なのは、食卓でのかかわり合いが減り、一緒に食べる人への興味や感情が薄れてい